



キルギスの首都ビシケクに派遣され、理学療法士として活動している。2024年11月から2年間の予定でキルギス・サッカー連盟に所属し、アカデミー世代のトレーナーとして選手のけが予防やリハビリ指導に当たる毎日だ。

発展途上国と聞くと、治

JICA  
だより



キルギス

清水紀之さん(30)

広島市佐伯区出身

安が安定しておらず、日常生活は危険で物資が不足しているといった印象をお持ちかもしれない。実際はサッカー競技には国内スポーツの中で最も資金が投じられ施設や用具も十分である。選手たちは恵まれた環境で日々活動してい

## U17代表の成長に喜び

る。  
キルギスのアカデミーでは、日本でいう小学6年から高校1年までの5学年が、学年ごとに代表チームを構成し、練習に励んでい



代表戦でアジアの強豪イランに勝利した後、喜びを爆発させるU17の選手たち

る。この点は代表活動の時だけ招集される日本と大きく異なる特徴である。  
主に同行しているアカデミーのU17代表は、今年11月のアジア・カップ予選に

り、選手の成長を間近で感じることができた。  
ただ、多言語環境に苦労する場面は多い。ここではキルギス語とロシア語が広く使われているが、代表チームの監督とは英語で話している。選手とも英語で会話をするのだが、けがの説

臨み、9日間で5試合という過密日程の中で3勝2敗の成績を残した。惜しくも選敗退だったが、この1年間で国外4カ国へ遠征し、国内外合わせると計16試合の国際戦を経験した。強豪のイランに勝利したこともあり、選手を自指す子どもたちの夢を支え、その成長を共に喜べる日々は何物にも代え難い。26年はアジア・カップ進出を目指す1学年下の代表チームと再び世界に向け挑戦する機会がある。自分ができることを一つ一つ積み上げていきたい。

明や症状を細部まで理解してもらおうのはなかなか骨が折れる。  
試合前のテーピングやリハビリを支える中で、選手を万全の状態を送り出せなかったときには「自分の責任だ」と押しつぶされそうになることもあった。それでも、言語や文化を超えて信頼関係を築き、現場で柔軟に対応する力が身に付いてきたと自負している。  
未来のキルギス代表やプロ選手を自指す子どもたちの夢を支え、その成長を共に喜べる日々は何物にも代え難い。26年はアジア・カップ進出を目指す1学年下の代表チームと再び世界に向け挑戦する機会がある。自分ができることを一つ一つ積み上げていきたい。